

武雄市図書館 に行きました(Ⅱ)

～ある県の図書館司書メンバー複数人にコメントをお願いしました～

<全体>

○ここは図書館ではないのか？販売・スタバスペース確保のために図書館機能がないがしろにされている。スタバと蔦屋の奥に申込のように作られたのが図書館スペースといった印象をうけた。図書館としては、とても使いづらい。

○見た目はいいものの、図書館として機能的でないし、地域に必要な資料が今後保存されていくのか心配。

○武雄市は図書館を、外部から人を呼び込むための観光施設としか考えていないように思われ、一番大切にされているのは商業部門のような気がする。

○年配の方が「ここは図書館じゃない」とお仲間に呟いていた。これがかつての武雄市図書館を利用していた武雄市民の本音かもしれない。

○子どもの読書環境などに気を使う人、きちんとした調べ物をしたい人などは、もうこの図書館には来ていないのかもしれない。

○どこの図書館に行っても無条件に落ち着くのに、ここでは落ち着けなくて疲れた。

<図書館・本屋ゾーン>

○棚が迷路、スペースにゆとりがない。車いすやベビーカーだと通りづらいただろう。奥の図書館部分に入る扉は重い。ツタヤの喧騒をシャットアウトする防音のために扉が必要なのだろうが、扉を入ったり、出たり2人以上が出入りするのには不便。

○どこからが図書館かわからない。「これは販売の本だから」と母親から図書館の本棚の方に連れて行かれていた子どもがいた。

○スタバにはたくさん座席があるが、図書館部分には座席が少ない。

○書架の本は利用されるためではなく、ディスプレイでしかない。わざわざダミーの本まで作っているのは、まさに背景としてのものでしかない。

○販売の力の入れ方に比べて、図書館の本はそっけない。書架の本がぐちゃぐちゃ。

○図書館が何かを発信しているのを感じられなかった。

<資料の配列と検索・さがしやすさ>

○ビジネスや年金関係、DVなどの本などが2階のバルコニーの書架に置かれていた。こういった生活設計や社会にかかわるようなことに関する本(政治、経済、法律、社会問題など)は、アクセスしやすいところに置いたほうがいいのではないかな。

○収集しても整理されてないから、目的の本がなかなか見つからない。

○蔦屋独自の分類がわかりにくい。表示もわかりにくいので資料にたどり着くのが大変。スタッフの方に聞いたら、分類法の表示や案内は特にないと言われた。それ以前に書架の配置がわかりにくいこと、奥の小部屋に切れ切れに配架されているため一貫性がない。

○参考資料も規則性のある配架が感じられず、基本的な辞書や広辞苑第6版が手の届かない上の方の棚にあった。ここで調べ物はできないと思った。

○一般書の棚の手の届かない上の方に児童書の「シャーロックホームズ全集」や伝記などがあつたり、ビジネス書の書架の一番上に「日本近代文学大事典(全6巻)」があつたり、意図的にその場所を選んで配架しているとは思えない。

- 朝日新聞縮刷版が2階の棚の一番高いところにあった。記事を検索するデータベースもないとのこと。なおさら、縮刷版は手に取れるところに必要。重くて厚い資料を高いところに置くのも危険。
- 国際資料は1列のみ。サインに中国語も併記されているのに、中国語で書かれた資料はない。
- 行政資料がない。男女共同参画に関する資料もない。
- 所蔵雑誌は20数タイトルしかなく、検索もうまくいかない。売物ならたくさんあるが。
- サインに中国語の表記があるのはいいが、字が小さくてわかりづらい。
- 棚番号の表記も小さく、わかりづらい。白いサインが売物で、黒いサインが図書館の本のようだった。
- 検索機の字が小さい。プリントしないと、どこにあるかもよくわからない。

<書架の高さ>

- 書架が高すぎ、上のほうの本は職員がとりますといっても、職員が見当たらない。2階のあの書架に至ってはそこに人がいないなら、1階に降りなければいけない。手のあいた職員はなかなかなくて、依頼しにくかった。
- いい本が棚の上にあっても、手に取れなければ無いのといっしょ。児童書架は高すぎて、子どもの背では見えないのでは？自由に手に取れてこそその開架。
- 子どもの書架も高くて、母親が踏台で取ろうとしたが届かず、子どもにあきらめなさいと言っていたのを見た。
- ポプラディア(子ども用の定評のある百科事典)ですら、子どもが全く届かない上の棚にあった。どうしてそこに置いているのかを聞いたら、使用頻度の高いものを手に届くところに置いているとのこと。それを誰が決めたのかと聞いたら、児童担当が決めた。せめて、ポプラディアは手に届くところに置いてほしいと伝えてもらった。

<カウンター>

- 全体の見通しが悪い。慣れの問題もあるが、レファレンスカウンターが探さないとないようなところにあるのはどうかと思う。あれでは職員同士の連携も取りにくく、利用者を見失って歩かせることにもなるのではないか。
- 複写申請書を書いて、提出したいときスタッフがいなかった。
- 登録カードを作ったが、図書館利用(貸出冊数・日数など)に関しての説明はなかった。
ツタヤプレミアムカード(年会費)を薦められた。

<児童コーナー>

- 雑誌「こどものとも」「たくさんのふしぎ」は、子どもコーナーからものすごく離れたところにある。バックナンバーは、どこかにあるのか？
- おはなし会はあるようだが、おはなし会のチラシはなかった。
- 夏休みなのに、子どものレファレンスを1件も見かけなかった。カウンターは「留守にしています」のまま。

<郷土コーナー>

- 2か所あり。片方は佐賀県内の市町村史、もう片方はガラスケースに入っていた。しかし、その中には「がばいばあちゃん」なども。どうしてガラスケースに入れているか尋ねたら、ずっと保存しておく必要がある本なのでコピーなどこぼされると困るからとのこと。
- 武雄の地域資料は、武雄市でしか手に入らないものもあり、武雄市が責任を持って収集すべきである。農業がさかんであるならば、農業の本をもっと収集すべきではないか？

<スタッフ>

○本の配架や、レファレンス、展示法など図書館人としてはありえない。ツタヤの方針や制約があるのかもしれないが、以前の司書の方々が残っておられるのであれば、経験に基づいた司書の専門性がなぜ見えないのだろうか。(あのような状況で、それでも一生懸命働いておられる方々を責めている訳では決して有りません)

<その他>

○分館も移動図書館もないということなので、市内の人のアクセスは？

○学校支援、市内の組織との連携は？